

島田事件と赤堀政夫

たいまつ新書 26 (赤)

1977年9月10日 第1刷発行

定価 680円

1979年2月7日 第3刷発行

著者◎ 赤堀闘争全国活動者会議編

発行者 大野進

発行所 株式会社 たいまつ社

〒160 東京都新宿区百人町 1-23-14

電話 03-371-1590

振替 東京 4-24362

印刷 厚徳社

<落丁・乱丁本はおとりかえします>

直接注文の場合、送料当社負担



たいまつ新書 26

島田事件と赤堀政夫

赤堀闘争全国活動者会議 編

はじめに

死刑を宣告された人々は、土曜の晩か祭日の前夜しか安眠することができないといわれている。なぜなら、死刑執行は日曜と祭日には行なわれないからである。

死刑執行は法務大臣が書類に印を捺すと、五日以内に自動的に執行される。

「死刑を執行する」という宣告は、執行の直前に言い渡される。ゆえに、死刑囚はたえず「今日か明日か……」と絞首台の恐怖におびえながら毎日を送っているのである。

一九六〇年（昭和三十五年）十二月十五日最高裁で「死刑」が確定して以来、一六年の長い年月、死の恐怖におびえつづけて暮している人——赤堀政夫（四八歳）がその人である。

「テイノー」「キチガイ」と石を投げられ、差別され、拷問され、島田事件の犯人とされ、確定「死刑囚」とされても、赤堀さんは無実の血の叫びをつづけながら生きぬいている。犯人にデッチ上げられたくやしさと、権力に対する憎しみをいだきつつ、限らないやさしさと強さをもって今日も生きぬいている。

「オマエノヨウナ、キチガイデアル、バカ者であるアカホリハ、真犯人の男の人の身代りに

なって、早く刑場へつれだされて、コロサレテシマエバヨイノダト言う考へたその上で、赤堀マサオに対して才判長さん、判事官のみなさんはムリヤリニデス、死刑判決を下したのです」(原文のまま)

長い獄中生活でむしばまれた、リユーマチの手にサインペンをにぎり、カタカナまじりの手紙を私たちに送ってくる。

そして、今日も叫ぶ。

「私は無実だ」

「私は久子ちゃんを殺してはいない」

赤堀政夫さんは、獄中に囚われて以来、今日で二四年目の春を迎えた。

一九七七年五月二十四日

編著者

島田事件と赤堀政夫／目次

はじめに

第一章 「死刑囚」 赤堀政夫

一 母親の愛情を受けて……………	7
二 教育から追われて……………	11
三 地域社会から追われて……………	18

第二章 島田事件とは

一 一九五四年、島田市……………	22
二 九人の目撃者……………	26
三 差別的見込み捜査……………	32
四 しかけられた罠……………	36

五	ウソの「自白」	41
---	---------	----

第三章 赤堀さんは無実だ！

一	不在証明	53
二	警察がつくった目撃者たち	77
三	物的証拠―石、足跡	81
四	法医鑑定	85
五	デッチ上げられた自白書	89

第四章 なぜ差別裁判か

一	精神鑑定問題の重要性	94
二	なぜ精神鑑定が導入されたのか	96
三	林・鈴木精神鑑定批判	98
四	精神鑑定はいかに悪用されたか	113

第五章 赤堀さんとともに

一 偉大なる先輩たち	132
二 闘いが全国へ	138
三 第四次再審請求棄却される	153
四 今後の闘い	155
赤堀裁判の経過概略	161
赤堀闘争関係住所録	163
おわりに	165

装幀・井上 宏

カバーカット・赤堀政夫手紙

第一章 「死刑囚」 赤堀政夫

一 母親の愛情を受けて

赤堀政夫さんは一九二九年（昭和四年）五月十八日、静岡県島田市本通り七丁目に生まれた。赤堀さんの幼児期については詳しくはわかっていないが、履物屋を営む実父母の下で、兄弟二人、妹二人とともに養育されたという。

父親は先妻との折り合いが悪く、離婚し家を出て、赤堀さんの母親と再婚した。家庭環境は平穏なものではなかったらしく、赤堀さんは、

「父ワ、兄姉、母タチトワ仲ガワルイノデス」と言っている。同じ手紙で、母親、兄、姉たちと父親がけんかをして、真夜中に父親が家を出て行ったことなども述べられている。

そのような環境の中で、赤堀さんにとって母親の存在はとりわけ大きく、幼児期においては母親との結びつきが非常に強かったようである。彼は、

「お母さまはとてもやさしくてやさしくてシンセツデシタ。セカイデーバン大好きデシタノデス。リップナ良い大切ナ大切ナ大好きナ大好きなお母さままで有マシタノデス」と言っている。

このような心情は幼児期からの母親との関係によってつちかわれてきたものと思われるが、その後の彼の人生の色々な場面にそれが母性的な情愛や、人情の豊かさ、他人への共感となつて現われているように思われる。たとえば一九四九年、静岡刑務所入所後、自殺未遂のため刑の執行停止となり、静岡市の溝口精神病院に入れられた時、同室の患者さんが電バチ（電気ショック療法、注参照）にかけられるのを見て、次のように書いている。

「イヤガルソノ人をムリヤリニヒキズツテイキマス。デンパチヲカケルノデスヨ。一人がヤツテイルトコロヲミテオリマストマルデ、自分がですデンパチヲカケラレテイルヨウナカンジガシマスヨ、コワクナリマス。足の方はガクガクトシマスヨ。カワイソウデカワイソウデキノドクデナリマセンデスヨ（中略）マサハソノヨウナカワイソウナカワイソウナキノドクナキノドクナ人タチヲミテイルノがとてもツライノデスヨ。ナミダガナミダガ目の中からポロポロトながれ出てきてユカタニオチマスヨ。ナントカシテコノヨウナカワイソウナカワ

イソウナキノドクナ人タチヲデス。私が一人でトビヲブチコワシテ助ケテヤリタイデス。スクウテ外ニツレダシテヤリタイデスヨ。ダマツテミテイラレマセンデス」

また、最近では、精神病患者会の患者が生活に困っているのを知ると、だまって見過しにできず、獄中二四年間の生活費を切りつめてためたお金の中から数万円を送金せずにはおれないのである。

このようなやさしく情にもろい傾向は単に一時的、表面的なものではなく、幼児期から現在まで赤堀さんの人格の底を流れていると思われる。

子供の頃の赤堀さんの遊び相手は、もっぱら近所の年下の子たちであった。

「私は一人ノ時、近所ノ年下ノ子供タチヤ妹と一しよに、近くの川へ魚取りに行くのが好きデシタ。フナ、ハヤ、ウナギ、をトルノデス。ユウガタ大井川へ行ッテ、河の中へおき針をシテクルノデス。ヨクアサ、ハヤメに行ッテ、オキ針を上ゲニ行クノデス。

ブツタイ（魚を取る道具）ヲ持ッテは取りニ行キマシタ」

また、年下の子がいない時は、「一人デお宮さんへアソビニ行ッテワヤタイや見せ物小屋ヲ見テ回ルノが好き」だったと言っている。

同年輩の子供たちといっしょに遊びたかったが、相手にされず、もっぱら年下の子や妹たちと、または一人で遊んでいた赤堀さんだった。

だが、彼の心のやさしさは周囲の人びとの印象に強く残り、実兄一雄さんは、

「弟はとても思いやりのある奴でしたよ。憎らしいくらいでしたよ。子供の頃食うものがないくて、兄妹で分けて食べなければならぬものを私が妹の分を取ってしまうのですよ。すると弟は、自分の分を妹にやるのです」と言っている。

母親の愛情を受け、心のやさしい赤堀政夫さんだった。

注 電気ショック療法

ベッドに仰向けに寝かせた患者の両側前頭部に電導子を当て、一〇〇ボルト前後の電流を約二秒間、通す。通電と同時に患者は叫び声を発して、手足を折り曲げ、やがて伸展しながら痙攣^{けいれん}に入る。普通一日ないし三日おきに一回行ない、一〇回から二〇回で一クールとする。通電時間が短かすぎると、患者は意識を失わないために、非常な恐怖感を覚える。痙攣時における骨折、脱臼などを防ぐためには、二、三人の看護者が顎、肩、手足を押さえる。

治療法というより、体罰的なものとして実施される場合が多い。副作用として「治療」直後に頭痛、頭重、嘔吐^{おうと}などが現われ、回数を重ねると記憶障害がおこることが少なくない。頻繁に行なう時には、健忘ないし失禁をとまなう特有な意識障害をおこす。

「治療」が五〇回前後くり返されると、自然に痙攣発作が現われるようになる。ちなみに、赤堀さん自身も電気ショックを二十数回受けているという。

二 教育から追われて

小学校時代になると、集団生活において赤堀さんの性格の良さがあまり認められず、周囲から疎外された時期を過さざるをえなかったようである。

赤堀さんは学齢で尋常小学校に入学し、一九四四年（昭和十九年）三月に国民学校高等科を卒業している。しかし、私信の中にもあるように、学業はふるわず、成績もクラスの中では下位にあったという。赤堀さんは、

「ドモリガアツテ、本ガウマク読メズ、勉強ワ、キライダッタノデス」

「私ワ、知能テイドガ低クテヒドク頭ガワルク教科書ヲウマク読メナイノデス」

「頭ガワルクテ、勉強ワデキマセンデシタ。学友ニワイジメラレマシタ。学校ニ行クフリヲシテ、一度学校に行き、机の上ニ、カバンヲオキマスノデス。弁当ヲ持ッテヌケ出スノデス」と言っている。

赤堀さんは学校では劣等生とされ、バカにされ、いじめられる存在であった。

「授業ノ終ツタアト、同級生ノ人4人位でブタ小屋ノソウジヲスルノデス。私ト他ノ一人デソウジヲサセルノデスヨ。ケンカの強イ人ワ見テイルダケデス」

「学友の人たちからは私は毎日／＼ヒドクイジメラレテイタノデス泣（カ）サレテイタノデスヨ。マサヲのパカヤロウ、ドモリヤロウ、ウスノロ、キチガイとワル口ヲ言ワレマシタ。学校へ行くのが一パンキライデス。（中略）花ツミ、お茶の実拾いエビガニトリ、その他のあそびをしていますとイジワルイ男の人タチガデス私に向つてはキチガイガキタト言イマス。バカガキタゾト言イマス（中略）石ヲナゲツケルノデスヨ、（中略）私はイツモ一人ボツチデスヨ、アソビ友ダチノ人ガオリマセンノデスヨ。キラワレ者デスヨ」

これらのことは、気が弱く、情にもろい性格の彼にとっては、つらい、耐えがたい経験であつたと思われる。

子供の遊び仲間からはじき出された赤堀さんにとって、唯一の楽しい思い出といえば、妹たちといっしょに近くの大井川で魚取りをしたり、カブト虫やキリギリス、バッタなどをつかまえて飼つたりしたことであつた。

「キチガイが来た」「バカが来た」といわれ、ひとりぼっちにさせられていた赤堀さんを担任の教師たちはどのように見ていたのだろうか。

「精神的におくる。何事も原始的の感あり、永続性なし。性温良なり、教師の命によく服従す」(尋常小六年学籍簿記載)

「成績良好ならず幼時脳膜炎を患いしため頭脳の働きにぶし」(高等小二年学籍簿記載)

このように教師に見られていた赤堀さんは、学校へ行くのが一番きらいだったといい、学校時代に楽しかった思い出なんか何もなかったと言いきっている。

「精神的におくる」「頭脳の働きにぶし」と切り捨てていったのが教師たちだった。すべての責任を赤堀さんに押しつけて、自分たちが日々、教室の内外で何をしてきたのかをいっさい問わなかった。

これらのことが、赤堀さんが差別され、排除されていく根となっていくのである。

赤堀さんが教育から排除されていったような、教育の中での差別の切り捨ては今でも続いている。昨年(一九七六年)十二月七日、福島県三春町でおきた要田中学生市川善一君の自殺事件を例にそのことを見ていきたい。

この事件は同年六月十八日、福島県田村郡三春町要田中学校で教員室から郵便貯金通帳が盗まれたことが、発端となっている。

教師はクラスの子供全員に「六月十八日は誰と下校したか」と問いただした。その時に市

川君は、ある子供の名を答えた。しかし、その相手の子供は「ボクは善一君といっしょではない」と否定したため、市川君に疑いがかけられることになった。

その後、十一月末になって、盗まれた通帳から金引き出されていることがわかり、市川君はふたたび教師から「犯人の名を書け、書かないと卒業できないぞ」と追及された。市川君は、わからないから書けないと断わったが、十二月二日から学校を休むようになった。

そして十二月七日朝、市川君は、

「一日学校に行ったら、柿沼先生がポケットをさぐり（預金通帳を）とった人の名を書けと言われた」と書き、さらに、

「学校がこわいので、もう行かない」と一九回もくり返して書いた遺書を残して死んだ。

彼が死んだことについて、校長は、

「善一君は、特殊学校があれば、まっ先に入れたいほど、特殊な子だった。自殺の原因について、さっぱり思いあたらない」

「勉強ぎらいが背景にあった」などと話している。

教師は「善一君に盗癖があったと聞いている」と言う。それは、三年も前に級友の持ち物が紛失した事件で、市川君が疑いをかけられたことがあるというだけの話だ。それを今回の盗難事件に結びつけていった理由は、善一君が通常のエデュケーションからやや遅れた生徒であった

ということにある。

このように、口べたで、おとなしく、やさしい少年が何の理由もなく犯人にされていくのは、赤堀さんが受けた差別と同じ差別が、現在の社会にも存在しつづけているからなのである。問われなければならないのは、市川君を排除し差別した福島県要田中学校の教師たちではないのか。

T少年との出会い

高等科一年（二三歳）頃になると、赤堀さんの前に一人の友人が現われた。それはTという、地域の子供仲間では赤堀さんと同じように除け者にされていた「非行少年」であった。身近な集団から疎外され、蔑視されていた二人が意気投合して、たちまち親友となっていたことは十分うなずけるであろう。

当時は、戦時中から戦後にかけての時期で、赤堀さんの家の生活も相当苦しかったらしい。「スイトンや、イモコのパン。カンパン、干イモ、大豆カス入りのメシ。イモメシ、ゾウスイナドヲ食ベテキマシタ。正油、ミソ、サトウの配給は一人分はトテモ少ないのです。ヤサイは野生や川際のとこにハエテイル、草をつんだりイモノ葉、カボチャの葉、ミツバ、セリ、ノビルなどの草を汁の実に使ったのです。タニシ、川魚エビを取ってヤイテ干してこの